

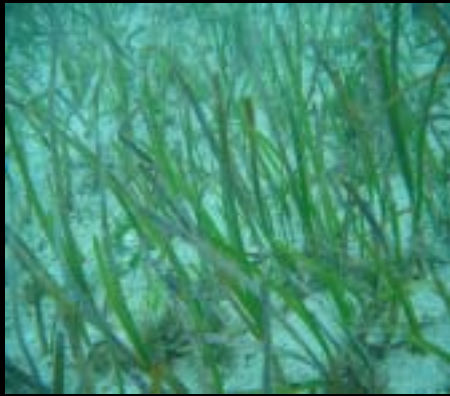
表紙(案)

中城湾港泡瀬地区

# 生物ハンドブック

- 海辺の生きものたち -

監修 香村 眞徳 / 立原 一憲 / 仲宗根幸男  
小澤 宏之 / 西平 守孝 / 新垣 裕治  
赤嶺 得信 / 大森 保



沖縄総合事務局 那覇港湾・空港整備事務所 中城湾港出張所  
〒904-2162 沖縄県沖縄市海邦町3-25 TEL098-938-9640

裏表紙（案）



## はじめに

中城湾港泡瀬地区においては、沖縄市を中心とする中部圏東海岸地域の活性化を目的とした国際交流リゾートや海洋性レクリエーション活動、情報・教育・文化の拠点となる「マリンシティ泡瀬」の実現のため、特別自由貿易地域に指定された中城湾港新港地区の航路整備に伴う浚渫土砂を活用して、人工島形式の埋立事業を進めております。

この事業は干潟に生息するカニや貝、トカゲハゼ、海中に生息・生育する魚やサンゴ、海草などの生物に与える影響を少なくするため、埋立面積を縮小するとともに、埋立地を沖合に出した人工島方式とするなど、出来る限り周辺の自然環境に配慮した計画となっております。また、工事を進めるに際しては、平成13年にとりまとめた環境アセスメントに基づき、周辺環境への影響を監視していくための調査（モニタリング）を継続して実施しているところです。

これらモニタリング調査や環境アセスメント時に見つかった動植物についてとりまとめるとともに、周辺海域における海生生物相や自然環境の特色などを整理し、野外でも使えるようなハンドブックを作成しました。

泡瀬地区で工事や調査を行う関係者におかれましては、本ハンドブックを携帯・参照され、当海域に生息・生育する生物をはじめとする自然環境の特色を十分に把握され、現場での環境保全への取り組みに積極的に関わって頂きますようお願い致します。

また、「マリンシティ泡瀬」のなかでは、「環境教育の場・人と自然との触れ合い活動の場」として野鳥園や干潟の整備が計画されております。一般の方々におかれましても、自然と共生したマリンシティ泡瀬の実現に向けて、環境利用学習などを行う際に本ハンドブックを活用していただければ幸いです。

2006年3月  
沖縄総合事務局  
那覇港湾・空港整備事務所

中城湾港泡瀬地区  
生物ハンドブック  
-海辺の生きものたち-

目 次

海での観察と注意	1
1. 自然観察の心得	1
2. 海の危険生物について	2
3. 観察時の注意と記録のとりかた	3
4. 情報提供の方法	4
5. 情報の共有と確認	4
<b>. 概 説</b>	5
1. 中城湾港と泡瀬地区の自然	5
2. 海域の水質、底質環境	7
3. 海域生物相の特色	8
4. 泡瀬地区で保全対策のとられている種	10
<b>. 泡瀬地区でみられる海辺の生きものたち</b>	15
1. <small>かいそう</small> 海藻類・ <small>うみくさ</small> 海草類	17
2. 魚 類	31
3. 甲殻類 (エビ・カニの仲間)	44
4. 貝 類	56
5. 造礁サンゴ類	89
6. <small>きょくひ</small> 棘皮動物 (ヒトデ・ウニの仲間)	102
7. 鳥 類	108
8. その他	124
泡瀬地区の図面(観察記録用)	128
参考図書文献リスト・報告書リスト	129
さくいん	133
監修・著者紹介等	巻末

## 海での観察と注意

### 1. 観察の心得

海生生物の多くは、人が採取することや生息場に踏み込むことによるストレスに弱く、限られた生息場所に人による攪乱が集中した場合、その個体群が絶滅してしまうことも予想されます。環境保全の観点から本ハンドブックに記載された各種について慎重な観察方法で観察することをお願いします。以下に、全般的な注意事項を示します。

干潟や潮間帯にみられる生物の中で、トビハゼやスナガニ類は人が近づくと巣穴に隠れてしまいます。じっとしていると出てくることもあります。やや遠くから双眼鏡で観察することをお勧めします。

転石下の生物を観察した場合は、石裏が乾燥しないように短時間のうちに元通りにもどすことがマナーです。

水があるところでは、マスクとスノーケルを使用した素潜りも観察方法の手段ですが、潮流や深場の存在、工事区域や船の通り道などに注意して、安全には細心の注意をお願いします。

生態観察主体に心がけ、形態観察や種類判定に必要以上の採取はしないでください。

貴重種の確認や生態的に重要な観察事項は、ぜひ、4ページに示す情報提供にご協力ください。

ゴミは海辺に捨てないように、ゴミが海辺に落ちていたら拾って持ち帰るように、環境保全へのご協力をお願いします。

## 2 . 海の危険生物について

当海域にも危険生物が生息し、観察や作業において被害が予想されます。これらの生物には近づかないようにしましょう。海の危険生物と被害の応急処置方法は、沖縄県文化環境部等から詳しいパンフレット等が配布されていますので、ご活用ください。以下に泡瀬地区の干潟や浅海域に多い危険生物と現場での応急処置法等を示します。



**ガンガゼ**

海草藻場内でよくみられる。トゲが刺さると抜けにくい。刺された場合は酢で洗う。

**ハブクラゲ**

裸での遊泳を避ける。刺された場合は酢やアルコールで洗う。海水で洗うのは良いが真水は禁止。



**ウミケムシ類**

転石下に多いので注意。ささった毛を毛抜きやピンセットで丹念に除去する。



**アイゴ類**

毒を絞出し、お湯につける。



泡瀬地区に生息する危険生物はここに紹介した以外に、タガヤサンミナシ、アンボイナ、ヒョウモンダコ、ウンパチイソギンチャク、オニダルマオコゼなど、たくさんいます。その他、海の危険生物については下記の本を参考にしてください。

「海の危険生物ガイドブック」(山本 典暎、2004)

「ダイビングポイントマップ (no. 9 (危険生物編))」(悦 秀満、2003)

### 3. 観察時の注意と記録のとりかた

海での生物観察は、陸上の野鳥や草木の観察に比べて海水や波の影響を受けるため、持ち物や服装にはよりいっそうの注意が必要となります。以下に主な注意点を示します。

沖縄で干潟を歩く時や浅海を泳ぐ時は、日焼け対策や危険生物に触れないため、帽子、長袖の着衣、ブーツ等足元のしっかりしたものを身に付け、ハンドブックや記録ノート、筆記具、カメラ等は防水対策を十分に考慮してください。

熱中症対策のため飲料水を必ず持って行ってください。

潮汐表を熟知して、観察は汐の動きにあわせて戻れる範囲で行い、上げ潮、下げ潮に十分注意してください。

広い干潟での物の置き忘れは、上げ潮で流出することも多く、紛失しやすいものです。



このような中で生物の観察を行い、記録をつけるのは困難なことが多く、はじめから無理をせずに見ることだけから始め、慣れてきてから観察記録や写真撮影を行うようにしましょう。ある程度の観察要領が身につけば、ハンディーのGPSによる観察位置の確認や生態の写真撮影、ビデオ撮影も可能となります。

このハンドブックの巻末に泡瀬地区の図面と観察メモ欄を添付しています。GPSの位置測定にも対応できるように緯度・経度のメッシュも入れてあります。コピーして現地での観察記録に役立ててください。コピーができる耐水紙も市販されていますので、費用はかかりますが便利なものです。

## 4. 情報提供の方法

泡瀬地区で生物に関する有用な情報が得られた時は、ぜひ下記事務所にお知らせください。環境監視や保全対策に役立たせていただきます。野帳記録やメモ、写真、ビデオでの情報提供の方法は以下のとおりです。

- (ア) 持参、郵送：野帳記録、情報メモ、写真、ビデオ、場合により標本
- (イ) F A X：野帳記録、情報メモ
- (ウ) インターネット：情報メモ、デジタル写真

連絡先 沖縄総合事務局 那覇港湾・空港整備事務所 中城湾港出張所

〒904-2162 沖縄県沖縄市海邦町3 - 2 5

TEL 098-938-9640 FAX 098-982-1314

ホームページ情報掲示板 <http://www.dc.ogb.go.jp/nakagusukuwankou/>

## 5. 情報の共有と確認

提供された情報については、管轄の事務所で利用させていただくことがあります。

情報を共有するため重要な事項については、当所で必要により確認調査を行い、その結果とあわせて以下のホームページに適宜公開します。情報提供者にあらためて詳細をご確認させていただくこともあります。

<http://www.dc.ogb.go.jp/nakagusukuwankou/>





## ・概 説

### 1 . 中城湾と泡瀬地区の自然

沖縄本島中南部の東海岸にある中城湾は、東と南に開いたCの字の形をしており、与那原町から津堅島の南に向かって海が深くなっています。湾の外側の縁は津堅島、久高島等の離島やサンゴ礁で囲まれ、津堅島の南側は水深 50mを越える深場となり、知念半島側の南部と勝連半島側の北部は、サンゴ礁からできた浅場になっています（写真1）。

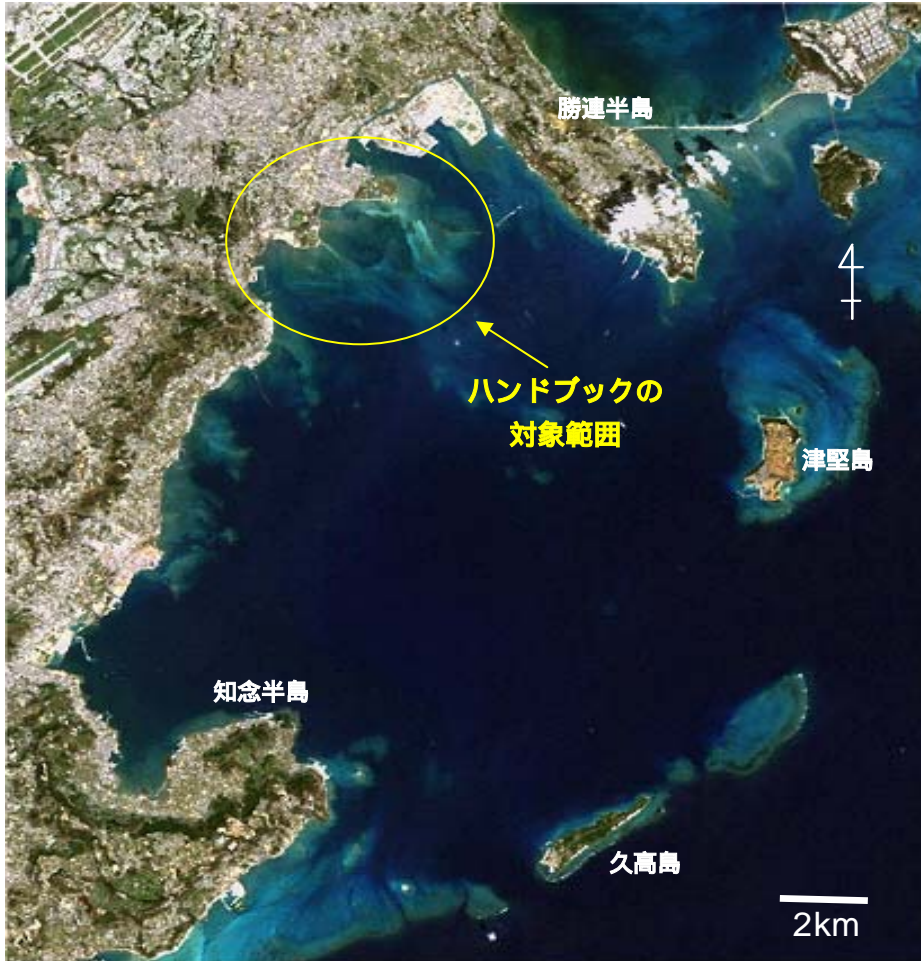


写真1 中城湾の衛星写真 1999.9.29 (沖縄県 HP より)

そのため湾内は外海に比較して波も穏やかであり、北部の新港地区周辺から泡瀬地区の南側にかけてと南部の佐敷東地区には砂質や泥質の干潟が形成されています。また、泡瀬地区から中城村地先にかけては、

海草藻場が発達しています。海草藻場は勝連半島の先端部や津堅島の西側、知念地区地先にもみられ、他に泡瀬地区から中城村地先、与那原地区から佐敷地区にかけての岩礁帯にはホンダワラ藻場もみられます。このうち与那原地区から佐敷地区にかけては潮間帯の岩礁にヒジキの群落が発達し、春に刈り取られたヒジキは、特産品としても利用されています（写真2）。



写真2 与那原のヒジキ生育場



写真3 上空からみた泡瀬地区

泡瀬地区は、中城湾の北西部にあり、泡瀬岬を中心とした遠浅の海域となっており、泡瀬岬と南側の奥武岬の先端部には潮汐で起きた流れによって砂が運ばれ、砂嘴（岬から細く伸びた砂州）が形づくられています。この海域の特徴は、泥質や砂質、れき質の干潟から浅海域の海草藻場、ホンダワラ藻場、サン

ゴ群生に至る変化に富んだ自然環境を有していることです（写真3）。

また、終戦後の米軍統治時代から埋立による土地造成や漁港、道路の建設で海浜地形が変化しており、その過程で現在の比屋根湿地や深掘り跡が形成されてきました。

戦前の泡瀬地区は、湿地帯が広がり、塩田や防風林、石積みの護岸やその背後の堀割（写真4）があったとされ、



写真4 今も残る堀割（うるま市勝連南風原）

昔から自然と共存した人間活動が行われてきました。沖縄の本土復帰後に整備された海浜護岸や国土を保全するための消波ブロック帯、人口の増加に伴う生活排水の増加が自然環境への影響や人と海域を妨げている弊害として社会問題化し、これからの開発においては、湿地や自然海浜の再生、親水性やバリアフリーを求めた海岸整備、生物多様性の保全が重要な要件となってきました。



写真 5 総合運動公園海浜部

泡瀬地区南側の奥武岬周辺は自然に配慮した総合運動公園として整備され、海浜部は自然石や在来の海浜植物で構成され、遊歩道から砂浜部、さらには干潟域へと自然にやさしいかたちで形成されています。今後の人と自然との共生を目指す上での先行事例ともいえます(写真5)。

このように泡瀬地区の自然は、元来原生な自然というよりは人の歴史の中で身近な海の自然であって、地形的、地理的に恵まれた環境の中で、その多様性を維持してきたものと考えられます。

## 2 . 海域の水質、底質環境

泡瀬地区の位置する湾北部は、沖に広がるサンゴ礁と勝連半島に囲まれた水深 10m以浅の海域と干潟域からなり、中城湾でも特徴的な地形



写真 6 泥質干潟

となっています。サンゴ礁帯には岩盤がみられますが、海底の底質は大部分が砂質とれき(サンゴれき)質からできています。

中城湾をとりまく背後の陸域からは、地質的に島尻層由来のシルト・粘土分が降雨によって海域へもたらされます。この泥は淡灰色でいわゆる赤土ではなく、クチャとよばれる泥(写真6)です。

このような泥の堆積は比屋根湿地内やその前面海域の一部にみられ、泥質干潟にマングローブと呼ばれる林をつくるヒル

ギ類の生育やトビハゼ、トカゲハゼ、シオマネキ類等の特有な干潟生物の生息場所となっています。また、海域の深みに流れた泥は航路筋や沖合の深みに堆積し、深場の泥質環境を好む生物の生息環境ともなっています。

泡瀬地区周辺海域における底質調査の結果からは、粒径（中央粒径値）が0.1mm以上、0.8mm未満の砂の堆積が干潟域や砂州の周辺、海草藻場のみられる海域に広がり、干潟の奥や航路内の深みには粒径が0.1mm以下の砂泥や泥が堆積していることがわかっています。

泡瀬地区には大きな河川の流入はありません。しかし、小規模な排水路には周辺の市街地化に伴い公共下水道への接続が遅れていることで家庭排水等が集中し、一部ではCOD（化学的酸素要求量）の濃度が約30mg/Lと高い濃度の排水が流



写真7 流入排水路からの汚濁負荷対策は、海域環境を保全するための緊急課題である。

入して干潟や沿岸海域へ汚濁負荷をもたらしています（写真7）。現在のところは、海域の水質の監視調査結果（平成12年～16年度調査）からCODの環境基準値（海域A類型：2mg/L）をわずかに越えることが時々あるものの、おおむねCOD1～1.5mg/Lの状態にあり、水質的には比較的清浄な海域といえますが、このままでは環境基準値を頻繁にオーバーする可能性もあり、陸からの汚濁負荷対策を強化していく必要に迫られています。

### 3. 海域生物相の特色

泡瀬地区の海域自然環境は、大きく分けて干潟、藻場、サンゴ礁、沖合部の深みに区分できます。さらに生物相の特徴からみると、干潟では鳥類がよく飛来し、比屋根湿地（写真8）にみられるマングローブ帯の生物相、トカゲハゼに代表される泥質の干潟



写真8 比屋根湿地風景マングローブ帯



写真 9 砂質干潟風景

干潟や浅海域に生息する生物は、微細な環境の区分で生息場所が決定することが多く、例えば貴重種の干潟性魚類であるトカゲハゼや海藻類のクビレミドロは、底質の粒度や地盤高、干潮時の湿潤程度等によって微妙に生息・生育環境が限定されています。



写真 11 ホンダワラ藻場

なお、泡瀬地区の豊富な生物相の詳しい状況は、当地区の事業実施に関連する環境影響評価や環境監視の過程で明らかになってきました。それゆえ、事業の実施にあたっては慎重な環境監視や保全対策が求められており、複雑で難解な海域生物の現状を知るためには、高度な専門知識と調査技術が要求されます。しかし、一般的なレベルでの認識を高め、だれもが身近な海域の自然に触れ、環境意識の啓発に役立つように配慮して、このハンドブックは作成されました。

生物相、ミナミコメツキガニやヘナタリ、二枚貝類等がみられる砂質干潟（写真 9）、海藻類が生育し、巻貝やヤドカリ類、カニ類が多い転石やれき質の干潟生物相に分けられ、藻場はリュウキュウスガモ等の海草藻場（写真 10）とコバモク、ヤツタモク等のホンダワラ藻場（写真 11）の生物相に分けられます。



写真 10 海草藻場

このような多様な生物を有する泡瀬地区では、これまで漁業が盛んに行われてきております。代表的なものとしては、沖合の砂地を利用したオキナワモズクの養殖や海草藻場内に設置した刺し網等による沿岸漁業であり、平成 15 年には沖縄市にて 483 トンの水揚げがありました。

## 4 . 泡瀬地区で保全対策がとられている種

泡瀬地区には多様な生物が多数生息・生育しております。その中でも、「環境省のレッドデータブック」や「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物種」などに指定された希少性のある種を中心に、泡瀬地区の事業において、生物への影響を少なくする目的で、様々な保全対策がとられております。ここでは、泡瀬地区で保全対策がとられている主な5種について紹介します。

希少性のランクについては、16 ページの表を参考にしてください。

### クビレミドロ

絶滅危惧 類(環境省)、絶滅危惧種(沖縄県)に指定されており、沖縄本島の限られた場所にだけ生育が知られる日本固有種です。

生息状況の監視、培養実験、移植実験などを行っています。

### トカゲハゼ

絶滅危惧 A 類(環境省)、絶滅危惧 A 類(沖縄県)に指定されており、日本では沖縄島中城湾、大浦湾沿岸でみられ、世界的に分布の北限です。

沖縄県が保全対策を目的に策定した「トカゲハゼ保全計画」をもとに、産卵期や稚魚の回遊時期に海上工事を制限しています。また、沖縄市新港地区ではトカゲハゼの生息地としての人工干潟の造成や種苗生産による放流も行われています。

### オキナワヤワラガニ

絶滅危惧 類(沖縄県)に指定されています。

工事の影響を監視するために、生息状況の調査を行っています。

### ニライカナイゴウナ

情報不足(沖縄県)に指定されており、泡瀬地区で最近発見された新種と考えられる小型の巻貝です。

工事の影響を監視するために、生息状況の調査を行っています。

### オサガニヤドリガイ

情報不足(沖縄県)に指定されており、沖縄本島で初めて確認された二枚貝です。

工事の影響を監視するために、生息状況の調査を行っています。

## クビレミドロ

絶滅危惧 類(環境省)、絶滅危惧種(沖縄県)

フシナシミドロ目 フシナシミドロ科  
*Pseudodichotomosiphon constrictus*



大きさ: 高さ1.5cm、径3cm

特徴: 糸状の体は円柱状で、ところどころがクビれている。これらが寄り添ってドーム状に生育する。

見られる時期:

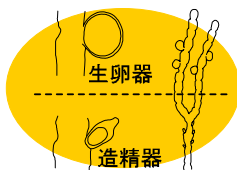
12月下旬～5月中旬  
(ピーク 3月中旬～4月上旬)

分布: 沖縄本島の3海域のみ。  
(泡瀬地区・屋慶名地区・恩納地区)

生育場所:  
細かい砂の干潟でコアママやマツバウミジグサと一緒にみられます。



春季



春～夏季



夏季



秋～冬季



生態: 春先(3月中旬～4月上旬)に、マット状に密生した群生域がみられます。この時期、ほとんどの株に造精子器と生卵器が形成されます。春～夏季かけては藻体に付着した褐色の受精卵がみられます。藻体は初夏に枯死流失しますが、受精卵は高水温の夏場に海底で休眠します。水温の低下する秋～冬季の時期に発芽し、細砂やシルトを枝間につけながら伸張します。

希少性: 日本固有種。  
黄緑藻類に属する海産種で、1属1種からなり、藻類の系統と進化を探る上で学術的にきわめて貴重な種です。

保全に関する留意点:

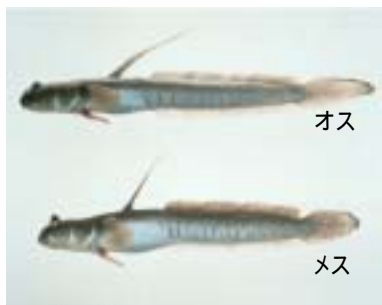
踏まないように足下に注意しましょう。

## トカゲハゼ

絶滅危惧 A類(環境省)、絶滅危惧 A類(沖縄県)

スズキ目 ハゼ科

*Scartelaos histophorus*



大きさ: 全長10cm(1年)、13cm(2年)、15cm(3年)。

特徴: 背びれは細長く伸びる。体は灰色で細い黒い線がある。トビハゼに比べて細く長い。

見られる時期:

年中みられるが、特に産卵期の4～7月頃は行動が活発で観察しやすい。

分布: 沖縄島の中城湾及び大浦湾、中国南部～オーストラリア北部。

生息場所:

トカゲハゼの生息地は内湾の泥質干潟である。本種は干出時に乾燥せずに海水が残る溜まりや淺筋沿いに巣穴を掘り、その周りで活動する。中城湾では、浮遊仔魚は湾中央部から南部にかけての水深20～30mの海域に生息する。



生態: 内湾の泥質干潟に巣穴を掘って生活し、日中の干潮時に干潟上の干出域を這い回り餌をとる。冠水時には巣穴に潜る。産卵時期は、巣穴の天井に卵が産み付けられる。産卵は雌雄1つがいで行われ、雄によるジャンプ等の一連の求愛行動が観察される。主に雄が卵を孵化するまで守るが、この期間には、空気を口に含んでから巣穴に戻るエアレーション行動が観察される。



希少性: 沖縄島における生息は世界的にも分布の北限であり、生物地理や沖縄の地史を考える上で重要。

保全に関する留意点:

踏まないように足下に注意しましょう。



## オキナワヤワラガニ

絶滅危惧 類(沖縄県)



エビ目 ヤワラガニ科  
*Neorhynchoplax okinawaensis*

大きさ： 甲長0.5cm。

特 徴： 小さなカニで、体は薄い茶色で、形は三角形。甲の石灰化が不十分で柔らかい。ハサミは他の脚に比べて非常に短い。泥の上の転石をひっくり返すとよく見られる。

分 布： 沖縄本島、石垣島、西表島。安波川河口干潟、大浦川河口干潟。泡瀬比屋根湿地前面干潟、比屋根湿地前面の仮設橋建設場所から北側の護岸に沿った延長800m、幅100m程度の範囲。



見られる時期： 年中。

生息場所：

泥粗砂と礫から成る底質の転石下にみられ、干潮時でも陸域からの流入水、潮だまりがあるような湿った環境に生息する。砂泥質の外干潟のタイドプールや、河口域の転石下に生息する。

生 態： 産卵期は7月。サイズの1年内に大人になり、産卵し、寿命は1年程度。転石に付着する小型の藻類等を食べる。干出時は転石下であればエラ内にたくわえてある水分である程度呼吸ができるが、直射日光や風にさらされると、短時間で死亡すると考えられる。



希少性： 生息個体数はかなり少ない。

保全に関する留意点：

ひっくり返した石は元に戻しましょう。

## ニライカナイゴウナ

情報不足(沖縄県)



異旋目 イソチドリ科  
*Leucotina* sp.

大きさ: 殻長約0.5~1cm。  
特徴: 殻は小さく、丸みを帯びた細長い円錐形、表面は灰白色~黒灰色。

分布: 沖縄島中北部。  
見られる時期: 年中  
生態: ソメワケグリガイ、リュウキュウザルガイなどの二枚貝の外側に外部寄生する。

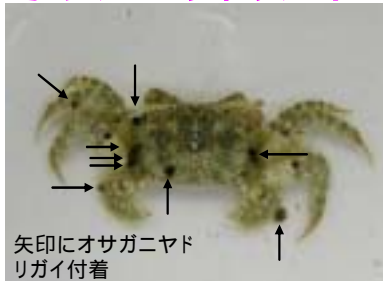
希少性: 同種群は二枚貝に寄生する特異な種群で、進化生態学や宿主特異性等の研究素材として重要であるが、その生態は殆ど知られていない。

生息場所:  
アマモ場周辺や内湾等の細砂底に生息する。

保全に関する留意点:  
貝を観察した後は、もとの生息場所に放してあげましょう。

## オサガニヤドリガイ

情報不足(沖縄県)



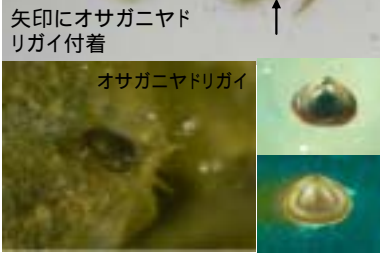
マルスダレガイ目 ウロコガイ科  
*Pseudopythina macrophthalmensis*

大きさ: 最大殻長3mm。  
特徴: とても小さな二枚貝であり、殻はふくらみがある。表面は紫褐色~淡い褐色。

分布: 沖縄全域(大東島海域等外洋域を除く)。  
見られる時期: 年中

生態: 砂泥~泥干潟のオサガニ類に付着している。

希少性: 干潟の様々な環境の石の下に他生物と共生する等して、適応放散しており、進化的重要性がある。

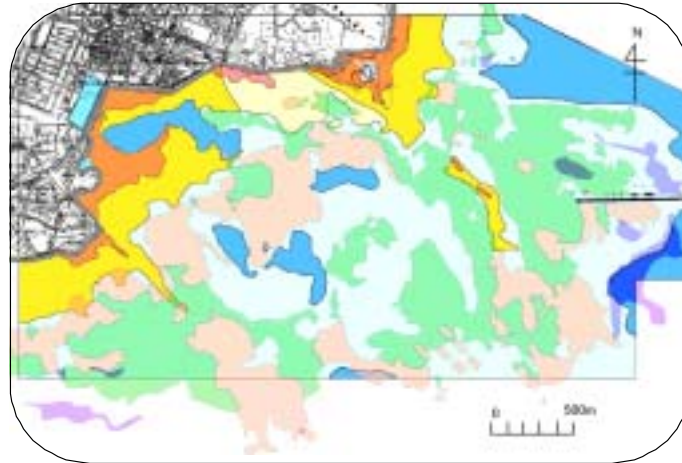


① 紫褐色個体 (殻長1.5mm) ② 淡褐色個体 (殻長1.5mm)

保全に関する留意点:  
貝を観察した後は、カニの巣穴の近くに放してあげましょう。

## 泡瀬地区でみられる海辺の生きものたち

ここでは、泡瀬地区の海の中や干潟・湿地で観察することのできる水生生物の中から代表的な海藻類・海草類、魚類、甲殻類、貝類、造礁サンゴ類、棘皮動物、鳥類等を生態写真で紹介します。各種の説明には下図の環境区分で主な生息場所の特徴を示します。



環境区分図

環境区分図凡例		ハンドブック表示
干潟	: 礫、粗砂の中に岩盤、転石が点在する潮間帯上部 (C.D.L. +1.2m以上)	干潟
	: 細砂を主体とする潮間帯上部 (C.D.L. +1.2m以上)	
	: 泥質潮間帯 (C.D.L. +1.2m以上)	
	: 礫、粗砂の中に岩盤、転石が点在する潮間帯下部 (C.D.L. +0.5 ~ 1.2m)	
	: 細砂を主体とする潮間帯下部 (C.D.L. +0.5 ~ 1.2m)	
藻場	: 海草藻場	藻場
	: ホンダワラ藻場	
サンゴ礁	: サンゴ礁	サンゴ礁
湿地	: 湿地	汽水
		淡水
		遷地
		陸域
陸域	: 陸域	海岸
海岸	: 海岸線	砂地
その他	: 藻場・サンゴ礁の成立可能な水深、底質条件の場所	
	: 水深が深い場所	

C.D.L. は中城湾港工事事用基準面を示します。

### 希少性のランク記号対応表

希少性の選定基準	ランク	
「文化財保護法」 (1950年5月公布)	特(天)	国指定特別天然記念物
	国(天)	国指定天然記念物
「絶滅のおそれのある野生動植物種の保存に関する法律」 (1992年6月公布)	(種)	国内希少野生動植物種
	(種)	国際希少野生動植物
「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-植物(維管束植物以外)」 (2000年 環境庁) 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-汽水・淡水魚類」 (2003年 環境省) 「無脊椎動物(昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等)のレッドリストの見直しについて」 (2000年 環境庁報道発表資料) 「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-鳥類」 (2002年 環境省)	CR+EN(環)	絶滅危惧 類 (絶滅の危機に瀕している種。)
	CR(環)	絶滅危惧 A類 (絶滅の危機に瀕している種-ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。)
	EN(環)	絶滅危惧 B類 (絶滅の危機に瀕している種- A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。)
	VU(環)	絶滅危惧 類 (絶滅の危険が増大している種-現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。)
	NT(環)	準絶滅危惧 (現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のあるもの。)
	DD(環)	情報不足 (評価するだけの情報が不足している種。)
	LP(環)	絶滅のおそれのある地域個体群 (地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群。)
「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(動物編) レッドデータおきなわ」 (2005年 沖縄県)	CR+EN(沖)	絶滅危惧 類 (沖縄県では、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。)
	CR(沖)	絶滅危惧 A類 (沖縄県では、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。)
	EN(沖)	絶滅危惧 B類 (沖縄県では A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。)
	VU(沖)	絶滅危惧 類 (絶滅の危険が増大している種-現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。)
	NT(沖)	準絶滅危惧 (沖縄県では存続基盤が脆弱な種-現時点での絶滅危険度は小さいが、生育・生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。)
	DD(沖)	情報不足 (沖縄県では評価するだけの情報が不足している種)
	LP(沖)	絶滅のおそれのある地域個体群 (地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。)
「沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータおきなわ」 (1996年 沖縄県)	危惧(沖)	絶滅危惧種 (絶滅の危機に瀕している種または亜種)
	危急(沖)	危急種 (絶滅の危機が増大している種または亜種)
	希少(沖)	希少種 (現在のところ「絶滅危惧種」にも「危急種」にも該当しないが、生息条件の変化によって容易に上位のランクに移行するような要素(脆弱性)を有するもの。)
	未決(沖)	未決定種 (現在の資料で希少性の判定が難しく以前生育が確認されたもの、現状が不明なもの。確認された種が疑わしいもの。)
	地域(沖)	地域個体群 (地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。)